

山と博物館

第45卷 第7号 2000年7月25日

市立大町山岳博物館

企画展「山川勇一郎の世界 —山岳風景と中国の風物—」について

大町山岳博物館

山川勇一郎は山をモチーフにした作品を多く残しています。なかでも、描く対象を前にして、感じじるままに画線を走らせたスケッチにこそ最もよく特色が現わされているといえます。

き日々がありました。一九四〇（昭和一五）年、上高地徳沢の小屋にて召集令状を受けた山川勇一郎は、兵士として中国に渡ります。その頃に描いた山とは異なるモチーフの作品群は、山岳画家として位置づけられ

スキーリと山旅をこよなく愛した山川勇一郎は、「一九〇九（明治四二）年に神戸で生まれました。東京美術学校（現東京芸術大学）を卒業後、安井曾太郎に師事し、「水会、日本山岳画協会などの会員となります。一九五八（昭和三三）年、当時話題となつたネバールのジユガール・ヒマール探査行に作家深田久弥、医師古原和美、写真家風見武秀とともに参加し、ヒマラヤの山や風物を書きとめています。その後、一九六五年（昭和四〇）、大阪府連岳友クラブ中央アンデス登山隊に同行しますが、チリのセントラル・アンデス、ロマ・ラルガ氷河のクレバスに呑まれ、その生涯を閉じることになります。

ことの多い山川勇一郎の違う一面を見せてくれます。今回、企画展「山川勇一郎の世界——山岳風景と中国の風物——」と題し、山をモチーフにした油彩と、山川勇一郎が若い頃に中国の濟南、北京を中心として描いた人物や街並のコンテや水彩約八〇点を展示します。中国時代の作品は、現在までほとんど公開されておらず、このたび遺族のご厚意により多くの方にご覧いただける運びとなりました。本展では山岳風景とともに中國の風物画を紹介することによって、「山岳画家」のみではなく、「畫人」としてとらえた山川勇一郎の世界を明らかにしようとするのです。なにとぞご高覧のほどよろしくお願い申しあげます。



前門大街（北京）

山川勇一郎 作

ニホンカモシカの呼び名と語源 —百六十三種の分類—（完結編）③

北村嘉寶

- 66、イッポン
一本立ちの角をもつた獸という意の隠語。
奈良〔吉野〕
⑩仲西政一郎「奥高野の狩りの話」（あしなか15）（山村民俗の会、一九四九年）

- 67、シマシカ
近世の文献に初出する呼び名で、当時の薬舗（薬局）で呼ばれていたもの。語源を明記したものには見当らないが、推測するに角の付け根部分には、縞模様（横じわ）があるの付シワシカと呼んだのが、シマシカに転訛したとか、最初から縞のあるシカ→シマシカと呼んだかのどちらかであろう。

- 68、タヌカク
漢字表記では单角。一本角と同義語の隠語。
大分・宮崎〔祖母山・頃山〕
文献49に同じ。

- 69、ツノ
カモシカは鹿と違つて、牝でも角を生やすている風変わりな獸という意の隠語。石川〔石川〕・長野〔北安曇〕
⑩尾口村史編纂専門委員会編「石川県尾口村史 第一卷」（一九七八年）

- 70、ツノボリ
角が役に立つ（風邪葉）奴。という意の隠語。ボリは群馬の方言で、例えば新潟の人を「越後ボリ」と呼び、ボリは人とか、者、物をさす接尾語として使つてゐる。群馬〔利根〕吉野秀市氏の書簡による。

- 71、クロ
体毛が黒色で、角も漆黒色のカモシカに対してもクロと呼んだ隠語。長野〔下伊那・茅野〕

- 72、シカ
里言葉の鹿子（シカの仔）を転用したマタギ言葉。宮城〔仙台・栗原〕・福島〔伊北〕
⑩金子絶平「南会津北魚沼地方における熊狩雑記」（アチック・ミューゼアムノート13）（アチック・ミューゼアム、一九三七年）

- 73、カゴ
文獻44に同じ。

- 74、カゴ
里言葉の鹿子（シカの仔）を転用したマタギ言葉。宮城〔仙台・栗原〕・福島〔伊北〕
⑩玉井邦彦「カモシカの方言」（動物文庫）（白井邦彦「カモシカの方言」）（動物文学会、一九六三年）

- 75、マツカ
真鹿の〔シ〕を〔ツ〕に代えてマツカとしたが、あるいはカモシカの棲む森林には、マツカ（又になつた木）があるので、これを転用したマタギ言葉。宮城〔栗原〕

- 76、カメシラ
鹿の呼び名をカモシカに利用した隠語。徳島〔剣山・大歩危〕・大分・熊本・宮崎
⑩黒川義太郎「動物談叢」（五月書房、一九七四年）

- 77、カノシカ

- 岡谷・諚訪・三重〔亀山・三重〕・奈良〔吉野〕・大分・宮崎〔傾山〕
⑩松山義雄「続々狩りの語部」（法政大学出版部、一九五八年）

- 六、他の動物呼称転用系統の呼び名
（二）鹿系統

- 72、シカ
カモシカが禁獣になつたため、上略称してシカと呼び、また鹿の名をそのまま転用した隠語。マタギがシカと言ふ場合には、カモシカの牡をさす。山形〔西置賜〕・群馬〔利根〕
⑩小野進「秋田県・奥羽北海の動物を語る」（小野進著作刊行会、一九三四）

- 73、マシカ
真鹿〔鹿〕が棲んでいない場合の呼び名で方言。分布地域の点から考えると、「シマシカ」・「カマシカ」の上略称とも判断される。

- 74、カゴ
文獻44に同じ。

- 75、カゴ
地着の鹿がいなくて、渡り鹿だけいる地域では、隠語としてカモシカを地鹿といふ。山梨〔西白井〕

- 76、カノンコ
カモシカをカノンコと代えて、隠語とした呼び名。福島〔南会津〕

- 77、カノンコ
「カノンコ」が訛つてカムンコとなつたか、当初からカムンコとしたのか不明。宮崎〔西臼杵〕

- 78、カノンコ
山口迫氏の書簡による。

- 79、カムンコ
鹿の仔をカノンコと代えて、隠語とした呼び名。福島〔南会津〕

- 80、カノンコ
「カノンコ」が訛つてカムンコとなつたか、当初からカムンコとしたのか不明。宮崎〔西臼杵〕

- 81、カンチヨ
地着の鹿がいなくて、渡り鹿だけいる地域では、隠語としてカモシカを地鹿といふ。山梨〔西白井〕

- 82、カノンコ
岩場で駿足さを見せるので、極めてすぐれた馬、駿馬の意味をもつ。駿馬に例えた方言。
〔大町・北安曇・諚訪〕
⑩信州哺乳類研究会編「長野県動物図鑑」（一九七八年）

- 83、カントクさん
毎日、一定の場所（造林作業現場）にカモシカが現われて、作業員の動きをジイーと凝視している姿から「監督さん」と呼んだ隠語（愛称）。福島・和歌山〔西牟婁〕
⑩宇江敏勝「山人の記」（中央公論社、一九八一年）

- 84、オヤジ
カモシカを尊んで呼んだ隠語で尊称。長野〔大町・北安曇・諚訪〕

- 85、リュウメ
語源は両角源美氏の書簡による。

- 86、ラッシャメン
ふさふさとした毛をもつカモシカの姿は、派手な恰好をしたラッシャメン（西洋人の姿）に似ているので、そのまま隠語として用いたもの。秋田〔由利〕

- 87、カラシシ
「シカ」と同様、牡（成獣）をいうマタギ言葉である。牡の呼び名には熊を用いた「クマン」があるので、牡に対しては鹿を用い、接尾語にケをつけてシカケそしてシカゲにしたのではなかろうか。福島〔南会津〕

- 88、カラシシ
漢字表記で唐獅子。中国（中華人民共和国）で中國風に表現された外国獸ライオンに対する和称である。カモシカをカラシシと呼んだのは①日本に棲む他の動物に比べると、異様な風体であるため、唐のシシカラシシと呼んだ。②雪中のカモシカは、あごひげが凍りついて走るたび、カラカラと音をたてるところからカラシシと呼んだ。③カモシカの

（一九六一年）

（二）その他の動物系統

83、カントクさん

鹿の呼び名をカモシカに利用した隠語。徳島〔剣山・大歩危〕・大分・熊本・宮崎
⑩黒川義太郎「動物談叢」（五月書房、一九七四年）

84、オヤジ
地方（岩手・奈良など）によつては、鹿の呼び名となつてゐるが、四国や九州ではカモシカをいう隠語。徳島〔剣山・大歩危〕・大分・宮崎

85、リュウメ
鹿の仔をカノンコと代えて、隠語とした呼び名。福島〔南会津〕

86、ラッシャメン
「カノンコ」が訛つてカムンコとなつたか、当初からカムンコとしたのか不明。宮崎〔西臼杵〕

87、カラシシ
岩場で駿足さを見せるので、極めてすぐれた馬、駿馬の意味をもつ。駿馬に例えた方言。
〔大町・北安曇・諚訪〕
⑩信州哺乳類研究会編「長野県動物図鑑」（一九七八年）

88、カラシシ
「シカ」と同様、牡（成獣）をいうマタギ言葉である。牡の呼び名には熊を用いた「ク

マン」があるので、牡に対しては鹿を用い、接尾語にケをつけてシカケそしてシカゲにしたのではなかろうか。福島〔南会津〕

89、カラシシ
漢字表記で唐獅子。中国（中華人民共和国）で中國風に表現された外國獸ライオンに対する和称である。カモシカをカラシシと呼んだのは①日本に棲む他の動物に比べると、異

様な風体であるため、唐のシシカラシシと呼んだ。②雪中のカモシカは、あごひげが凍りついて走るたび、カラカラと音をたてるところからカラシシと呼んだ。③カモシカの

【モ】の字が誤記されたか、または隠語化するため、取えてラに変えた等の諸説があるが、明確な資料はない。

分布地域は一応、宮城としておく。

(6) 佐々木喜一郎『宮城県史』15 (宮城县史刊行会、一九五六)

足の爪が割れて、又になっている奴^{（ま）}という意の隠語。群馬「利根」吉野秀市氏の書簡による。

89、ウシ

カモシカは牛科の動物であり、角は小型であるが、牛に似ているということから名付けられた隠語。

かつてはヤマノウシと呼んでいたが、役牛（農耕牛）が減少したので、上略称して單にウシと呼ぶようにしたという。三重「熊野」辻本力太郎氏より聴取。

90、ウシオニ

「形、飼牛と同様にして角あり、毛並みは伸々綺麗にしてつるつるとし、人を害せず、草、木の葉をすべて喰いとる。これウシオニ（牛鬼）なり云々」という記録がある。形全体は牛に似ており、頭には二つの角があるの

で牛とし、しかも鬼に似た角ということで、ウシオニにしたと考えられる。奈良「吉野」

(7) 津田松苗・小清水卓三『十津川』(奈良県教育委員会事務局文化財保護局、一九六二)

91、カモブタ

毛深くて、コロコロして丸っこく見え、豚に似ていることから名付けられた隠語（愛称）である。岐阜「恵那」

(8) 大作栄一郎『カモシカ撮影行みどり』(12) (林野弘済会名古屋支部、一九七四)

八、行動系統

92、マワリジン

旧二月を過ぎると、カモシカはそろそろ、山を歩きまわる習性があるので、廻りジシとし

たマタギ言葉。秋田「仙北」

(9) 武藤鉄城『青シンの話』『旅と伝説』11 (5) (三元社、一九三八)

93、オドリジン

人が異装（扮装）して踊りながらカモシカに近づくと、それに見とれて動かさずいることから名付けた隠語（愛称）。因みに慶米の『古今功紙次第第二十三箇條』を見ると、『カモシシ』というもの、イワツツジ（注：帶紅色の小花が咲く）を見て舞いまう』とあるが、カモシカが永い冬から解放され、跳躍する春先の行動をみて、舞うと表現したのであろう。オドリジンといつても、人間の方が踊るわけである。福井「立石半島」

(10) 柳田国男『山村語彙』『山林』(大日本山林会、一九三一—一九三三)

94、ウタシシ

早乙女（田植えをする若い女）が、歌いながら田植えをしていると、カモシカが近くの岩場に立って、ジャーフと歌にききほれでいることから、歌の好きなシシという意味で呼んだ隠語。福井「立石半島」

(11) 林清一『敦賀半島とカモシカ』(敦賀市教育委員会、一九六二)

95、ノロ

ノロマな動きの獸という意のマタギ言葉。今ひとつは、隣接県（新潟）のカモシカの呼び名「ノロジカ」の下略称かとも考えられる。

秋田「北秋田・仙北」

(12) 武藤鉄城『玉川部落の話』『旅と伝説』15 (10) (三元社、一九四二)

96、ノロジカ

ノロマのノロと鹿とを組合せたマタギ言葉。新潟「岩船・北魚沼・中魚沼・南魚沼・十日町」

(13) 風間辰夫『三面のマタギ物語』(狩獵界) 26 (4) (狩獵界社、一九八二)

97、ノラシシ

のらくらしている夫という意で、ノラシシとした隠語。秋田「北秋田」・埼玉「北葛飾」

文献73に同じ。

98、アホ（アホ）

カモシカの無警戒さに対する蔑称で、阿呆を転用した隠語。岐阜「恵那」・三重告』(日本カモシカセンター、一九六九)

99、バカシシ

カモシカは、山中で突然出会った場合でも、余り遠くへ逃げることもなく、人が接近しても、もジーッとしていて、捕えやすいので、馬鹿な夫という意の隠語（蔑称）。富山「中津川」

文献93に同じ。

100、ヒヨウロク

カモシカは一見したところ、愚鈍に見えるので、里言葉の表六・表六玉（愚鈍な人を罵つていう言葉）を語源にしたマタギ言葉。新潟「岩船」

(14) 森谷周野『三面のスノヤマ』(蒲原別冊) (新潟県民俗学会、一九七八)

101、オカル

なんとなく女性的で、楚々とした風情があり、またどことなく、あどけなくて可愛い奴という意味をこめた隠語（愛称）。岐阜「安八」

(15) 牧野典彦「犬が吠えたら熊が出た」(全獣46 (1)) (全日本狩獵俱楽部、一九八一)

102、オバケ

猪や鹿狩の折、カモシカが思わず時にヌッと姿を現わし、獵師をびっくりさせたり、また誤って射ち殺したりすると、恐い目に警察沙汰（）にあうことなどからオバケと呼んだ隠語。岐阜「安八」

文献86に同じ。

103、タツコアオ

人間を見ても、タツコ（木の根つこのこと）のように、ジャーフと動かないでいることから、里言葉のタツコに「アオ」をつけて、タツコアオとしたマタギ言葉である。新潟

(16) 佐久間淳一『狩獵の民俗』『民俗芸術』(佐久間淳一著、岩崎美術社、一九八五)

104、タツコ

「タツコアオ」の下略称であるが、最初から名をカモシカにつけたものと呼んでいたとも考えられる。新潟「中蒲原」

文献12に同じ。

105、ワカシシ

ワカシシ（若夫）といえば、仔を想像するが、四一五才（成獣）をいう隠語である。おそらく、隣接県（富山）の「バカシシ」の呼び名をカモシシと聞き誤り、そのまま長野に定着した可能性が高い。長野「大町」

(17) 高橋秀男『カモシカを追つて』(山と博物館9 (4)) (大町山岳博物館、一九六四)

106、バタバタ

カモシカが、岩から岩へと跳ぶときに足を振るわす音が、バタバタと聞えることから、その音を擬声語とした呼び名で隠語。宮崎「大崩山」

(18) 小野勇一ほか『大崩山カモシカ調査報告』(大崩山学術調査報告) (一九七二)

107、ナキカラ

牝（成獣）をいう隠語。四月上旬頃、仔を産んで仔連れとなつた牝は、キヤツ、キヤツとよく鳴くので、よく鳴くクラシシの意で名付けたもの。（牡はあまり鳴かない。）柄本「日光地方」

(19) 下村兼史『原色狩獵鳥獸図鑑』(一九六五)

108、ダマリクラ

仔連れの牝はくらべ牡は、あまり鳴かないので、黙っているクラシシという意でダマリクラとした隠語。柄本「日光地方」

文献86に同じ。

109、シッケイ（シッケイ連れ）

マタギ言葉では仔を、隠語では親仔一対（仔連れ）をいう呼び名である。

シッケイの語源はカモシカの親が怒つて鳴く声が、シユシユシユ、仔はケエケエケエと鳴くことから、両方の声を併せてシユケイと呼び、それが転訛してシッケイになつたといふ。シッケイ連れともいふ。

一方、マタギ達が仔の呼び名をシッケイとしたのは恐らく、彼等が群馬地方に出猟してきた時に知つたシッケイを仔の呼び名に転用したのではないか。群馬「利根」・福島

〔南会津〕・宮城「白石」

〔中村謙『羚羊の話』（一九七三）・小林三雄『利根川源流のかもしら』（一九七三）

〔マタギ言葉について：文献⑤に同じ。〕

110、チヤチャ
体色と鳴き声とを語源とした隠語（愛称）。

カモシカの体毛には黒青色、茶、灰色と鈍色の強いもの、白色系のものなどがある。

鈴鹿山系には、概して茶褐色の個体が多いので、茶々という隠語にしたか、あるいは逃げる時の鳴き声、シャツシャツをチヤチャという擬声語にしたか、どちらかであろう。三重・滋賀〔鈴鹿山系〕

112、角田保「カモシカ保護の緊急・恒久対策を練る」〔カモシカ（2）〕（日本カモシカセンター、一九七六）

111、シャンシャン
追われて逃げる親は、シャツシャツと鳴くことから、シャンシャンという擬声語としたもので隠語。和歌山「東牟婁」現地で聽取。

113、シャンコ
〔シャンシャン〕の略称。和歌山「東牟婁」現地で聽取。

114、グラグラ
カモシカの鳴き声には、フシユツ、ケエケ

エ、ギアヤーギアヤーのほか、沢山あるが、ガラガラとも鳴くので、当初はガラガラと呼んだのが、訛つてグラグラになつたと考えられる隠語。群馬「利根」

呼び名は白井邦彦氏の書簡による。

十、体色系統の呼び名

(一) 青系統

115、アオシカ
〔伊豆国産物帳〕（一七三六年）に収録されている。この当時はカモシカは禁獣ではなかったから方言であつたと考えられるが、東日本（方言分布上）に広く分布している。青森〔中津軽〕・群馬・新潟〔岩船〕・山梨〔中巨摩・南巨摩〕・静岡〔中巨摩・南巨摩〕

116、アオ（アウオ）
体色が似ていることから黒馬〔アオ〕になぞらえた隠語。アオはもともと、青色の馬をいうが、江戸期から昭和初期にかけて東北の馬産地では、黒馬をアオと呼んでいたからであろう。

このほか、語源として①肉が少々あお臭いこと、②皮をなめすと皮裏が青くなること、③顔の色が帶青色を呈すること、④体毛に時折、紫黒色の毛が混じり、遠望すると蒼く見えること、⑤体毛に綿毛が多いので冬期には、毛の中が青く見えることなどが、語源だとする説がある。

また、古代日本の色名に明・暗・顯・漠が

117、アオシシ
〔元文諸国産物帳〕（一七一六年）に同じ。

118、アオシ
〔アオシ〕の下略称で隠語。福島〔山口辺氏の書簡〕による。

119、アオンコ
体毛が、晴天時のうすい空色に似てかかるところから名付けられたもので、アオの鹿がアオの鹿となり、さらにアオンコと訛つた隠語。

120、アオタ
「アオ」と、女の卑称であるメンタなどに使われる「ンタ」とを組合せ、アオンタとしたのが、アオタに訛つた隠語と考えられる。秋田〔西置賜〕・宮城〔白石・刈田〕・福島〔耶麻〕・新潟〔北蒲原・中蒲原〕・長野・滋賀〔甲賀〕

121、アオスス
橋本賢助の「山形県の哺乳類」（一九三九年）に収録されているマタギ言葉である。

アオと後述のスヌとを組合せたものか、アオ

声するときの「生み字」のウの音が、特に強調されたもの。共にマタギ言葉であるが、新潟県北蒲原郡赤谷郷、青森県西津軽郡の一部では、方言となつていている。

〔86〕後藤興全「又鬼と山窓」（書物展望社、一九四〇）

〔87〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

123、アノ
マタギ言葉で、大型のカモシカをいう。中位の大ささのものはホノという。語源不詳。秋田〔仙北〕

124、アエメ
夫婦連れをいうマタギ言葉で、アオシシのアオと、夫婦のメとを組合せた呼称。秋田〔雄勝〕

125、アエメ
〔東成瀬村における又鬼の今昔〕（自費出版、一九五〇）

126、アオシ
シシ（宍）はもともと、肉を意味しており、主として肉食獸をさす。「アオ」と宍を組合せたマタギ言葉である。青森〔中津軽・西津軽・南津軽・北津軽〕・秋田〔北秋田・山本・雄勝〕・山形〔東根・東田川・西村山・東村山・最上・西置賜・飽海・尾花沢〕・岩手〔岩手・下閉伊〕・宮城〔白石・刈田・栗原・加美・王造・仙台〕・福島〔耶摩・南会津・西会津・河沼〕・新潟〔中蒲原・東蒲原・北蒲原・北魚沼・岩船〕・群馬〔利根〕・山梨・富山〔立山〕・長野〔蒲原郡小川莊間組滝谷村産物〕・享保・元文諸国産物帳〕（一七一六年）

127、アオシ
〔三重県在住〕

本文に関する問合せ先
〒五二九一三四〇三 三重県北牟婁郡海山町上里三七六
電話 ○五九七三一六一一三三四

128、アオシ
〔仙北〕

〔三重県在住〕

本文に関する問合せ先
〒五二九一三四〇三 三重県北牟婁郡海山町上里三七六
電話 ○五九七三一六一一三三四

129、アオシ
〔山口辺氏の書簡〕による。

130、アオタ
「アオ」と、女の卑称であるメンタなどに使われる「ンタ」とを組合せ、アオンタとしたのが、アオタに訛つた隠語と考えられる。秋田〔西置賜〕・宮城〔白石・刈田〕・福島〔耶麻〕・新潟〔北蒲原・中蒲原〕・長野・滋賀〔甲賀〕

131、アオスス
橋本賢助の「山形県の哺乳類」（一九三九年）に収録されているマタギ言葉である。

アオと後述のスヌとを組合せたものか、アオ

シシの転訛したものか、どちらかであろう。

岩手・新潟

〔88〕文部省著「又鬼と山窓」（書物展望社、一九四〇）

〔89〕文部省著「又鬼と山窓」（書物展望社、一九四〇）

シシの転訛したものか、どちらかであろう。

岩手・新潟

〔90〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔91〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔92〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔93〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔94〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔95〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔96〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔97〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔98〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔99〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔100〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔101〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔102〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔103〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔104〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔105〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔106〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔107〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔108〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔109〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔110〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔111〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔112〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔113〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔114〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔115〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔116〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔117〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔118〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔119〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔120〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔121〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔122〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔123〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔124〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔125〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔126〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔127〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔128〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔129〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔130〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔131〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔132〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔133〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔134〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔135〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔136〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔137〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔138〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔139〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔140〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔141〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔142〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔143〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔144〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔145〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔146〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔147〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔148〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔149〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔150〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔151〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔152〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔153〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔154〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔155〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔156〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔157〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔158〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔159〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔160〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔161〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔162〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔163〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔164〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔165〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔166〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔167〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔168〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔169〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔170〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔171〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔172〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔173〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔174〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔175〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔176〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔177〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔178〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔179〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔180〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔181〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔182〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔183〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔184〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔185〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔186〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔187〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔188〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔189〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔190〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔191〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔192〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔193〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔194〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔195〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔196〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔197〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔198〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔199〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔200〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔201〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔202〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔203〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔204〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔205〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔206〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔207〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔208〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔209〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔210〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔211〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔212〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）

〔213〕菊池慶治「東成瀬村における又鬼の今昔」（自費出版、一九五〇）